

共同研究の経緯と概要

神田由築

一 目的

本書は、国立歴史民俗博物館が、二〇一四年度から二〇一六年度にかけて実施した共同研究「近世の一枚摺文化の受容と都市社会の研究」の報告書である。

日本では十六世紀末に西洋から活版印刷術が伝えられ、国内でも独自に作られた活字で書物が印刷されるなど、一部活版印刷が流行をみただものの、その後は製版印刷が発達し、多種多様な印刷物が生み出されることになった。本研究で研究対象とした一枚摺も、その一つである。ここで言う一枚摺とは、瓦版や番付、引札など、版木を彫って一枚の紙に摺り出された印刷物の総称である。これらの一枚摺は、安価で迅速に制作されるという利便性があり、最も民衆の生活に密着した印刷物として社会情勢や文化状況を敏感に映し出してきた。

一枚摺は、浮世絵のような美術的な価値が認められた多色摺とは違って、基本的には単色摺をベースとする消耗品であり、それゆえに良好な状態で残存しにくい傾向があるが、全国各地の機関のなかには、たとえば名古屋市蓬左文庫、国立国会図書館、早稲田大学図書館、三井文庫、東北大学附属図書館狩野文庫など、一枚摺を所蔵するところも少なくない。

い。なお、それらの情報は、東京大学史料編纂所が公開する摺物の書誌情報データベース「摺物データベース」(近世史編纂支援データベース)のうち)で検索することができる。

国立歴史民俗博物館所蔵の『懷溜諸屑』も代表的な一枚摺コレクションの一つで、以下の特徴がある。

- ① 約三、四〇〇点にのぼる本格的な一枚摺のコレクションである。
- ② 天保・安政期(一八三〇―五九)頃に江戸の入船扇蔵という落語家が収集したと考えられる個人コレクションである。
- ③ 内容が商売、世相、災害、芸能など多岐にわたる。

このうち③は一枚摺コレクションの全般にみられる特徴であり、①も数量だけでみれば突出した特徴であるわけではない。それに対して②のように、一枚摺の収集の主体や時期が明確で、なおかつ一枚摺の作成年代と収集年代とがほぼ同時期である点は、他の摺物とは一線を画した、同コレクションの性格を決定づける特徴である。

一枚摺は同時に大量の複製が生み出される印刷物だから、一点物の文書や肉筆画に比べたら、固有の史料としての価値は低い。しかし、たとえば同じ内容の摺物が複数の機関にあったとしても、それぞれの摺物が制作され、人から人へと伝えられて市中に流布し、さらに世代を超えて持

ち伝えられた過程——つまりコレクションの形成過程には、固有の背景が存在する。すなわち一枚摺には、内容の多様性という魅力もさることながら、これらを受容してきた社会・文化の、それぞれの歴史的段階における様相が、コレクション形成過程に投影されているという点で、一点レベルでの固有性とは異なる史料的可能性、あるいは史料的可能性が秘められているのではないだろうか。

しかし、そうした観点から一枚摺コレクションを位置づけなおした本格的な研究はほばない。それは、コレクションとしてのかたちが整えられたのが制作時期と同時代ではないとか、伝来が何段階にもわたって錯綜しているとか、それぞれの事情があつて、そもそもコレクション自体が、その史料的可能性を探れる環境にないことが大きな要因であろう。それに対して『懷溜諸屑』は、収集の主体や時期が明確であり、こうした一枚摺の史料的可能性を追求するのに格好の素材である。しかも、都市江戸の社会・文化が爛熟期を迎えた近世後期に制作され、ほぼ同時期に収集されたこと、落語家という芸能者が収集したこと、などの点から、都市社会史や芸能史や美術史など、あらゆる研究分野のアプローチが可能である、複数の専門領域からなる研究者の共同研究にふさわしい素材でもある。

本研究は、以上の点をふまえて、二〇一四年度から二〇一六年度の三年間にわたり、日本近世の社会史、都市史、芸能史、美術史を専門とする総勢八名（当初は九名）からなる研究者を組織して、『懷溜諸屑』所収の一枚摺が収集された背景を探りつつ、その史料的可能性を総体的にとらえながら、一枚摺の受容という視点から近世都市の社会・文化研究を再構築することを目的に遂行されたものである。

研究の開始にあたっては、具体的に以下の三つの目標を掲げた。

第一に、『懷溜諸屑』所収の一枚摺を用いて、近世後期の民衆生活や都市の社会・文化について複合的な視点から共同研究を深めるとも

に、一枚摺の史料的可能性を追求する。具体的には、多岐にわたる内容に対応するために、社会史、都市史、芸能史、美術史などの研究者による共同研究のスタイルを取るが、従来のように、個々の研究にとつての断片的な史料として一枚摺を利用するのではなく、発想を転換して、むしろ一枚摺そのものからどれだけの情報が得られるか、一枚摺の可能性を主眼に据え、これまでの各自の研究蓄積と照合しながら近世後期の社会・文化の新たな歴史像の構築をはかる。

第二に、『懷溜諸屑』が近世の落語家によつて収集されたコレクションであるということ自体の意味を問い直すことを目的とする。同コレクションは、その豊富な内容から研究的価値が高いことは言うまでもないが、その成立の経緯にこそ最大の特徴がある。これらの一枚摺が、どのように収集されたのか。その成立の意味を説き明かすために、落語研究の第一線で活躍する研究者との共同研究を試みる。その過程で、文化受容の問題について一定のモデルを示すことを目指す。

第三に、『懷溜諸屑』の膨大な情報を現代社会における知的財産として位置づけなおし市民に発信してゆくことも、研究目的の延長線上に据える。経済活動を裏づける商標や、祭礼や芝居などの娯楽に関する資料、そして地震や火災、疫病などの災害資料など、一枚摺にうかがえる近世後期の世相は、多種多様な実態と課題を抱える現代の都市社会にも通じるものがある。これら情報を整理し有効に発信するために、博物館学芸員（および経験者）をメンバーに組み込み、現場からの提言も行つてもらうことを考える。

一枚摺の魅力は、何と言つても、民衆の生活に密着した史料である点である。よつて約三、四〇〇点の一枚摺を所収する『懷溜諸屑』からは、近世後期の都市民衆の生活が克明に浮かび上がるであろう。そうした意識を共有しながら、都市の社会・文化について複合的な視点から共同研究を深めた結果が、本報告書である。

二 研究組織

研究組織と各構成員の所属、研究分野、本研究におけるおもな研究テーマは以下の通りである（所属は二〇一四年現在）。

今岡謙太郎 武蔵野美術大学（日本芸能史・歌舞伎と落語）
岩淵令治 学習院女子大学

（日本近世史・都市史およびデータベース整理）

高橋修 東京女子大学（博物館学・史料学）

高山慶子 宇都宮大学（日本近世史・都市の庶民信仰）

中川桂 二松学舎大学（日本芸能史・落語と寄席）

西田亜未 たばこと塩の博物館（日本近世史・都市社会と歌舞伎）

大久保純一 国立歴史民俗博物館（日本絵画史・美術史）

神田由築 お茶の水女子大学

（日本近世史・研究総括、都市社会と遊芸文化）

久留島浩 国立歴史民俗博物館（二〇一五年度以降は研究協力者）

三 研究遂行過程

【二〇一四年度】

第一回研究会 二〇一四年六月二十九日（日） 国立歴史民俗博物館

『懷溜諸屑』の実見とその史料的意义に関する討論

第二回研究会 二〇一五年二月二十一日（日） お茶の水女子大学

今岡謙太郎「資料と系図類から見る落語家の同時代意識」

中川桂「六代目までの桂文治代々―『本朝話者系図』と『懷溜諸屑』を素材に―」

【二〇一五年度】

第一回研究会 二〇一五年五月十六日（土） お茶の水女子大学

高橋修「口上書引札と商品切手」

高山慶子「お竹大日如来と江戸の庶民信仰―入船扇蔵『懷溜諸屑』を手がかりに―」

大久保純一「幕末錦絵の出版形態」

第二回研究会 二〇一五年八月四日（火） マイドームおおさか会議室

大久保純一「幕末錦絵の出版形態」

西田亜未「芝居茶屋関連資料について」 「国芳の校合刷りと元ネタとしての京伝の本の比較」

神田由築「江戸の音曲文化」

史料調査 八月五日（水） 大阪歴史博物館

「大阪歴史資料コレクション」の調査

史料調査 八月六日（木） 大阪城天守閣

「南木コレクション」の調査

第三回研究会 二〇一六年二月二十一日（日） 二十二日（月）

二〇一六年度のシンポジウム開催に関する討論

史料調査 公益社団法人三木文庫所蔵の摺物調査

【二〇一六年度】

第一回研究会 二〇一六年六月十一日（土） お茶の水女子大学

中川桂「嘶家番付類に見る近世の桂文治代々」

高橋修「引札の文体考―文書伝達と口頭伝達の間に―」

高山慶子「お竹大日如来と江戸の庶民信仰―『懷溜諸屑』を手がかりに―」

大久保純一「『懷溜諸屑』から見る江戸の絵双紙屋」

シンポジウム 二〇一六年七月三日（日） お茶の水女子大学

国立歴史民俗博物館・お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター

共催

第十八回 国際日本学シンポジウム「イメージと伝達の国際日本学」

セッションⅡ「落語家が収集した一枚摺の世界」

落語実演 桂藤兵衛（落語協会）「色事根問」

座談会 桂藤兵衛、今岡謙太郎、中川桂

研究発表

中川桂「噺家番付類に見る近世の桂文治代々」

高橋修「引札の文体考―文書伝達と口頭伝達の間に―」

高山慶子「お竹大日如来と江戸の庶民信仰―『懷溜諸屑』を手がかりに―」

大久保純一「『懷溜諸屑』から見る江戸の絵双紙屋」

パネルディスカッション 司会 神田由築

第二回研究会 二〇一六年八月二十五日（木）

史料調査 早稲田大学演劇博物館「伊勢辰貼込帖」の調査

第三回研究会 二〇一七年二月十二日（日） お茶の水女子大学

三年間の共同研究の総括と今後の成果発表に関する討論

四 研究成果

本研究では、①『懷溜諸屑』を用いて、近世後期の民衆生活や都市の社会・文化について複合的な視点から共同研究を深めるとともに、一枚摺の史料的可能性を追求する、②『懷溜諸屑』が近世の落語家によって収集されたコレクションであるということ自体の意味を問い直す、③『懷溜諸屑』の膨大な情報を現代社会における知的財産として位置づける、なおし市民に発信してゆく、という三点をおもな目標として掲げた。

共同研究としては、二〇一六年七月の国際日本学シンポジウムにおいて開催したセッション「落語家が収集した一枚摺の世界」での研究成果がひとつの集大成であり、本書の大きな前提ともなっている。そこで、本シンポジウムで提示された論点を整理し、これまでの成果を確認しつ

つ、今後の課題を探ることにしたい。

第一に、共同研究を開始した時点で、そもそも史料を収集した入船扇蔵とは「誰か」という大きな問題があった。たしかに、『懷溜諸屑』が入船扇蔵なる落語家によって収集された一枚摺のコレクションであることは、すでに情報としてあった。しかし、近世期に「入船扇蔵」を名乗った落語家は複数いる。そのうちの「誰」なのか。本コレクションの最大の特徴であり、性格づけの基盤となるはずの「個人」としての情報が、実はこれまで特定されていなかったのである。

一般的にも、落語家の代数確定は系図の混乱や情報不足などにより容易ではない。それが今回の共同研究のなかで中川桂により、『懷溜諸屑』所収の史料群の年代が扇蔵の活動時期と同じだという仮定のもとで、この扇蔵は三代目（前名は扇子）にあたると解明された。三代目入船扇蔵は、同時代に江戸で活躍した落語家・四代目桂文治と比較して、それほど大きな名跡ではないが無名でもない。番付でいえば中下位クラスの落語家が、身近な寄席ビラや半札、瓦版などを熱心に（あるいは捨てられずに）集めてできたコレクション――そうした『懷溜諸屑』の誕生にまつわる周辺事情が浮かびあがってきた。

第二に、口頭伝達と文書伝達の間位置するという、史料学的な観点からみた一枚摺の特徴が確認された。とりわけ高橋修は「口上」「口演」などを表題とする引札（商品・商店等の宣伝札）の文書様式に着目し、こうした一枚摺が口頭伝達の語調を文字化したものであると提起した。あるいは、実際に引札が配布される場面を想像してみると、引札に文字で書かれた情報が、そのまま口頭伝達されていた可能性もある。それらの点から、引札の文字情報は、まさしく口頭伝達と文書伝達の間位置するものであるといえる。

さらに高橋は、『懷溜諸屑』所収の江戸の引札と大坂の引札との比較から、都市によって口承文化の浸透度に相違があるのではないかと指摘

した。これは二〇一五年度に大阪歴史博物館と大阪城天守閣で行った、大坂の一枚摺に関する共同調査の成果でもある。このように一枚摺は、近世における口承文化と文字文化の関係を考えるうえでも重要な論点であり、史料学的な観点からもまだ研究対象としての可能性を秘めていることが明らかになった。

第三に、一枚摺の作成者の問題である。『懷溜諸屑』には摺物の代書を引き受ける「代作屋代作」なる者の引札が収められている（史料番号21-113）。戯作者による代書活動はすでに指摘されているところだが（木越俊介「代作屋大作」花笠文京の執筆活動について『近世文藝』69）、高山慶子は江戸で流行し一枚摺の題材にもなった「お竹大日如来」について紹介しながら、こうした信仰や開帳のブームの背景に一枚摺作成者が深くかかわっていたのではないかと、この論点を提示した。一枚摺は、制作者と消費者の距離が、時に重なるほど近く、同時代の民衆の潜在的欲求に直結するメディアである。一枚摺の史料価値は、この「同時代性の共有」という点に大きく依存する。そうしたメディア媒体としての特性を熟知して民衆を煽動する人々が身近にいたことが、『懷溜諸屑』というコレクションが成立した大きな契機になっていると考えられる。

『懷溜諸屑』所収の一枚摺が、戯文のネタに使用された可能性もある。一方、『懷溜諸屑』には「おかひてう落しばなし（御開帳落し咄）」（史料番号3-102）という摺物も含まれる。落語家―一枚摺―戯文―戯作者という連環を精緻に追いかけることで、メディア媒体としての一枚摺の特徴が、より明らかになるに違いない。

第四に、一枚摺はどのように販売されたのか、という販売の局面についてである。江戸の絵双紙屋が錦絵や草双紙だけでなく多様な品々を販売していたことは、すでに知られているが、大久保純一は浮世絵に描かれた絵双紙屋の店頭の模様や、『懷溜諸屑』所収の引札や掛紙（包装紙）

など画像史料を用いて、刊行物の書誌情報からは検知できない小売りの局面がわかると指摘して、目葉や小間物などと一緒に錦絵や草双紙が売られていた、江戸の絵双紙屋の多様な販売形態をより具体的に描き出した。販売の局面における一枚摺の用途は、商品そのものであったり、商品の包装紙（掛紙）であったり、販売の宣伝（引札）であったり、さまざまである。一枚摺は、あつかう題材だけでなく、用途も多様性に富んでいる。こうした販売の局面もまだ追究の余地がある。

この他、本書には江戸の社会・文化について考究した岩淵令治、西田亜未、神田由築の論考、および国際日本学シンポジウムの際の座談会記録を収録している。

以上、本研究では『懷溜諸屑』をモデルとした一枚摺の史料的可能性を確認し、またこれを受容する近世後期の都市の社会・文化についての共同研究を深めてきた。これらの諸点はこれまでの成果であると同時に、今後の研究課題でもある。一枚摺が提供する情報は限らない。今後は、たとえば『伊勢辰貼込帖』などに見られるような近代の東京における江戸文化趣味の興隆など、その後のコレクションの展開を視野にいたした考察も必要になる。もちろん、民衆生活を理解するための史料としても、非常に有益である。『懷溜諸屑』ならではの特徴を活かした今後の研究の進展に期待したい。

（お茶の水女子大学基幹研究院、国立歴史民俗博物館共同研究代表者）